



船橋 聖一

1954年4月11日東京生まれ

『せいいち性』その由来と行方」なんてよくわからない題名をつけて3回の連載を始めます。

好きな人や物に「こっちへおいで」と誘うこと

は誰しも一生に数回はあるでしょう。好きな人や物に「そっちへいくよ」と勇気を奮うこともあるでしょう。結果どうなるのか、どうしていいのかは少しだけわかっているが、よくはわからない。でもそのときせっかく湧き上がったその気持ちを無理に冷ましてしまうより、その気持ちに従ったほうがいいのではないか、それが「せいいち性」のひとつです。

ではおつきあいいただければ嬉しいです。私は元県立高校教諭でした。36年間。

「被災地三県・任期付き職員募集」の電車内広告

2019年6月9日(日)、3人のベトナム人青年(前橋で暮らす技能実習生)と高崎線で本庄駅に向かっていました。千葉市に住む3人のベトナム人実習生のアパートに彼らを案内して会いに行った帰りだった。

2017年秋、十日町市松之山での稲刈りが終わり、新米の配達も終わって、12月末までの約70日間、ハノイの人材派遣会社で日本語を教える機会を得た。無給だがビザ代、往復航空運賃、ホテル代は会社負担だ。ハノイで先の6人は何度も小さなパーティーや旅行や自宅に私を誘った。青年たちが先生に声をかけて誘う文化は日本にはないのでびっくり嬉しいだった。

18年の冬、彼らは来日して3年間の技能実習生生活が始まった。6人を豪雪の十日町に連れていったり、3人ずつに別れて暮らすようになってからも前橋の3人を案内して千葉の3人のところへ遊びに行った。その帰りに電車内の広告にふと目がとまったのだ。「被災地三県・任期付き職員募集」とあった。立ち上がって広告をよく見ると年齢制限はない。私はすでにそのとき65歳だ。ちょっと残念なことには、前日8日に都内で開催された三県の担当者や任期付きの経験者による説明会は終わっていた。雇用条件の職種「一般事務」が気になったが、7月に大船渡で開催された「第7回復興チンドン祭

り」に参加した帰りに、自転車を袋に積んで三陸リアス鉄道に乗り、大槌から田老まではサイクリング、また三陸リアスに乗って久慈でJRに乗り換え、八戸一泊。7月17日、盛岡に行き県庁11階の人事委員会事務局へ応募の願書を提出した。郵送でもいいのに。



東日本大震災津波からの着実な復興や地域振興の推進に向けて、あなたがこれまで培ってきた専門的な知識や経験を、県職員としてどのように生かすことができるか述べて下さい。

これが9月22日に東京の都道府県会館で実施された第1次試験の作文試験の題名だった。

そうして3月に内定の電話があり、4月1日「辞令書」を受け取った。

「行政職2級125号給を給する。任期は令和3年3月31日までとする。商工労働観光部産業経済交流課勤務を命ずる。」(任命権者 岩手県知事 達増拓也)